

2024年2月8日(木)

老球の細道772号

満足、慢心の落とし穴

会津バスケットボール協会 室井 富仁

19世紀イギリスの経済学者、社会思想家のジョン・スチュワート・ミルは「満足した豚であるより、不満足な人間のほうがいい。満足した患者より、不満足なソクラテスのほうがいい」という有名な言葉を残している。十分な餌を与えられた太った豚は、飢えてやせ細った人間の価値にはかなわない。盗んだ金や裏金で目先の欲望を満たし満足する患者より、理想を目指し、善なる生き方に悩み続ける不満足なソクラテスのほうが価値はある。

先日カタール・アルラヤンで行われたサッカーアジアカップ準々決勝で、3大会ぶり5度目の優勝を狙った日本(世界ランク17位)はイラン(同21位)に逆転負けを喫した。先のワールドカップでドイツやスペインを破り、今大会も優勝候補筆頭であったが、今何とか中東情勢を騒がしているイランに防戦一方でベンチワークも機能しないであっけなく敗退。

「W杯優勝」という壮大な目標を掲げ、今大会では圧倒的な力を示す場だったのが予想外であった。世界は一瞬たりとも留まっていない。朝日新聞には次のようなコメントが掲載されていた。富安選手「自分たちがやりたい試合は一つもできなかった。勝利への執念が足りなかった」。日本サッカー協会田嶋会長「浮かれているはダメ。『アジア最強』とか『調子がいい』とか言われていたが、一からやり直すいい機会にしたい」。

スポーツの戦いの世界では過去の成績、実績がずっと続くわけではない。世界ランキングが上だから、横綱だからと言って下のランク、レベルに必ず勝てるとは限らない。強いチームが勝つのではなく、勝ったチームが強いのである。Bリーグの連戦でも、土曜日の試合に勝っても日曜日の試合にはコロッと負けてしまうことは日常茶飯事である。負けたチームは次の試合で相手チームを倒すための戦略、戦術を準備する。それに対して勝ったチームは、勝利に満足して次なる準備がおろそかになれば簡単に足元をすくわれてしまう。

先日のミニバスケットボール市民体育祭において城北行仁女子チームのアップセットの連続には驚いた。以前からチームの進捗状況を佐藤公希コーチから話を聞いたり、坂下シュートクリニックなどに参加している選手がいるので注目していた。大会の度に良くなったり、悪くなったりしていたが、コーチが常に「不満足なソクラテス」であり続け、決して満足しなかったのが功を奏したのだろうか。

今大会でも大敗するチームがあった。矛盾するかもしれないが、こちらは大会の中でも局地戦や自分自身のレベルアップに「満足」できる点をコーチが探して、次なるチャレンジにモチベーションをキープさせてほしい。「あきらめない」ことを学ぶ場もバスケットにある。

何事も人生の原理原則は同じ。満足、慢心は次なる進歩、向上を阻み、敗北、不満足、逆境はとらえ方次第で更なる飛躍へのエネルギーとなる。目標が達成しても喜び、満足は一瞬で終わる。真の競争相手は自分自身である。満足も束の間、次なる高みに向けて「不満足なソクラテス」が頭をもたげてくる。自分自身との戦いに終わりはない。爺の戦いもしかり。